東南アジア研究　14巻2号　1976年9月

ビルマの壁画(Ⅲ)

——ニャウンヤン時代を中心として——

大野　徹

Wall Paintings of Burma in the Nyaungyan Period

Toru OHNO

Many frescoes can still be seen on the inner walls of the Buddhist temples in the Pagan area. Most of them were painted during the twelfth and thirteenth centuries. It also seems likely that many frescoes would have been painted during the next three hundred years. It is strange however that so far none of them has been discovered. On the other hand, several frescoes painted during the last half of the seventeenth and the first half of the eighteenth centuries remain, in fairly good condition, in Pagan, Sagaing, Pinya, Pahkangyi and Shwebo districts.

Frescoes painted in the "*Nyaungyan* period" (I consider it better to use this term rather than the "*Ava* period", because the Burmans regard the latter as the dynasty established by *Thadominbya* in 1364 A. D. which lasted until 1552 A. D.) show notable characteristics in comparison with those of the Pagan period. For example, both men and women are portrayed with round eyes, plump noses and thick lips. A large protuberance is shown on one side of the face, as if he were holding a big toffee in his mouth. Men of high rank usually wear long robes with short sleeves and no opening. This sort of dress has no collar and is like a long T-shirt. Soldiers carry either a sword, a spear or a bow, and a circular shield. There are no soldiers armed with muskets. Women's hair is worn up, drawn through a ring or funnel-shaped hair ornament. These peculiarities disappear entirely in the Kongbaung period.

はじめに

パガン時代のビルマの壁画は，かつて報告したように[1] 仏伝または本生譚を画題とする宗教画である。その性格上，描かれた場所はすべて煉瓦造りの方形寺院内部の漆喰壁面に限られている。当然，壁画の所在地も，ニャウンウー，パガン，サレーといったパガン時代建立の堂塔伽藍の存在場所に集中している。このような仏教建築物はパガン時代以降にも引き続き建てられはしたものの，その数はパガン時代にくらべると著しく減少する。従ってパガン時代以降に

* 大阪外国語大学ビルマ語学科

1) 大野徹 (1973); 大野徹 (1974).

描かれた壁画も，数的にはパガン時代とは比較にならないほど少ない。

年代別にみると，ビルマの壁画はパガン時代（1044-1287），なかんずく12世紀から13世紀にかけて描かれたものが圧倒的に多い。次いでニャウンヤン時代（1605-1752）とコンバウン時代（1752-1885）の作品が比較的豊富に残っている。ただしニャウンヤン時代とはいっても，それらの作品はたいてい18世紀前半のものである。コンバウン時代の壁画は，18世紀後半から19世紀末に至るまでの約1世紀半の間にまたがっている。

不思議なことに，パガン時代滅亡からニャウンヤン時代に至る約300年間というものは，ビルマ壁画史上まったくの空白である。パガン時代にはあれだけおびただしい数の壁画が描かれたにもかかわらず，パガン時代以降になるとビルマの壁画はようとして消息を絶ってしまう。壁画が再び姿を現わすのは，ニャウンヤン時代それも17世紀後半に入ってからのことである。いずれにせよ今日までのところ，14世記から16世紀までの 300年間に描かれた壁画は，まだひとつも知られていない。もちろんこの 300年間にも，パガン時代にくらべるとその数こそ著しく減ったとはいえ，各地に寺院が建立されたはずであり，寺院の建立が行なわれた以上その内部には壁画が描かれたに違いないのである。にもかかわらずひとつも発見されていないという事は，当時描かれた作品が後世篤信の仏教徒の手によって白色に塗り潰された可能性を示唆している。例えば，タールン王の治世（1629～48）に書かれたタウンビーラー問答書には，サガインのヤーザマニスーラ仏塔（カウンフムドオ・パヤー）の欄楯にジャータカ 547話を描いたという記述があるが，[2] 現在どこを探してもその痕跡は見出されない。これは後世塗り潰さにほかならない。壁画が描かれているという情報を得て炎天下を尋ね歩いた末ようやく探しあてた寺院では，壁面全体が石灰で真白に塗り直され壁画の痕跡すらとどめていないという状態に接してひどく落胆した経験は筆者にもある。

時代を経た古い壁画になればなるほど損傷の度合もひどい。壁の漆喰は無惨に剝がれ落ち，土埃，雨漏りによるしみ，引っ掻き傷，落書きなど，長い歳月の間に加えられた自然的，人為的な破壊の数々によって，壁画は薄汚い醜い壁の汚れに一変している。従ってそれらの壁を新しく塗り変える事は，敬虔な信者にとって当然のことであり現世において功徳をひとつ積み重ねる事にもなる。信者の手によるこうした無意識の破壊のほかに，古くなった壁画の上に後世新たに壁画を描き直すといった事も行なわれたものと推測される。

とにかく14世紀から16世紀までの 300年間に描かれた壁画は，遺憾ながらビルマではまだ発見されていない。もっとも筆者自身まだ確認する機会を得ていないが，サガイン時代（14世紀）の壁画とニャウンヤン時代でも珍しい事に17世紀前半の作とみられる壁画とがごく最近発見されたという情報を得た。双方とも製作年代に誤りがないとすれば，それはビルマ壁画史の

2）ウー・マウンマウンティン「タールン王時代の壁画」（ビルマ文）Loketha Pyithu Nayzin, 1969-11-15.

空白を埋める貴重な発見と言わなければならない。前者はビルマ政府文化省考古局マンダレー分室の美術史担当技官の教示によるもので，サガイン丘陵のミーパウチー寺院の上方，チャイラッ寺院の中にあるという。後者の存在は国営新聞「労働者人民日報」の副編集局長の説明によって明らかになったもので，サガイン郡ユワティッチー村のラウンウーモー寺院内にある。画題は画の下に記されているビルマ語の墨文によると，シャン，アラカン，タボイ，パラウン，

図1　ユワティッチー村ラウンウーモー寺院の壁画の模写図

図2　ユワティッチー村ラウンウーモー寺院の壁画の模写図

ユン(タイ国西北部の住民に対するビルマ語の呼称)，アユタヤ，中国，ミェンナメー（黒面）など101種の民族の姿と兵士およびラーマーヤナ劇中の場面だとの事である。描かれた時期はアナウペッルン王の治世(1605-28)だというからそれが正しければ17世紀の前半という事になる。

このラウンウーモー寺院の壁画のごく一部分が旧知のビルマ人美術家ウー・エーミイン(U Aye Myint)の好意によって模写という形で筆者の手許に届いた。わずか2枚の模写（図1，図2参照）ではあるが，そこに描かれている人物群像を仔細に検討する事によってこの画の製作年代を推し量ることができる。もちろん現物を確かめもせずに軽々しく断定を下す事は避けなければならないが，人物群像の容貌，髪型，衣装などの特徴から判断すると，ラウンウーモー寺院の壁画にはニャウンヤン時代の壁画の特色はあまり認められず，むしろコンバウン時代の壁画との間に類似性を有しているように思われる。この点，今後の調査が必要であろう。

Ⅰ　ニャウンヤン時代の壁画の特徴

ビルマ政府文化省考古局は，ビルマの壁画史を，(1)パガン時代，(2)インワ時代，(3)コンバウン時代初期，(4)アマラプーラ時代，(5)ヤダナーボン時代の5期に区分している。[3] ところでそこで用いられている“インワ時代”とは，1364年タドーミンビャーによって創始され1552年まで続いたシャン系のインワ王朝を指すのではなく，タウングー王朝の後期すなわちアナウペッルン王によって1605年に再建され1752年まで続いた“ニャウンヤン時代”を指している。ビルマ史ではニャウンヤン時代のことを“第二次インワ王朝”ともよぶから“インワ時代”という考古局の呼称はかならずしも間違いとは言えないが，シャン系のインワ王朝と混同される惧れがある。従って本稿では，こうした曖昧さ，紛らわしさを避けるために，ビルマ文学史の世界でも使われている“ニャウンヤン時代”という呼称を用いる事にする。

一般的に言って，壁画がいつ描かれたか，その製作年代を判定する方法には幾つか考えられる。最も確実なのは，壁画と同じ壁面に製作年代を明示してある場合である。ビルマの壁画においては，たいていの場合画の下層に説明文が記されている。こうした説明文はパガン時代の壁画において既に認められる。筆者自身直接調査し得た寺院の中では，パトーダーミャー，ナガヨン，ミンカバー村のクーピャウチー，アローピェ，ローカテイパン，ミインピャグー，ピャッサシュエグー，寺院番号418などにはモン語文，アベーヤダナー寺院にはパーリ語文，ローカテイパン，ウェッチーイン村のクーピャウチー，レーミェンナー，ウィニードー，タンブーラ，タヤンブー，コンドオヂー，テッチャムニ，ヤッサウ，ティンガヤーザなどの諸寺院にはビルマ語の解説文が，それぞれ記されている。

3) Archaeological Department (1966).

ここで注意すべき点は，壁画や墨文がすべて，寺院建立と同時に描かれたとはかぎらないことである。寺院自体はパガン時代の建造であっても，内部の壁画や墨文は後世のものである場合も少なくない。例えば12世紀後半に建立されたスーラマニ寺院の内部の壁画はコンバウン時代初期のものであるし，13世紀の建立と言われているウパーリ戒壇の壁画も18世紀末のものである事が明らかになっている。墨文にしても，パガンに現存する寺院の中からパガン時代以外に，インワ時代，タウングー時代，ニャウンヤン時代，コンバウン時代など各時代の墨文が幾つも発見されている。[4)]

前述のように，壁画の下層には説明文が記されているのが普通だが，描いた年代まで明示したものはさほど多いとは言えない。パガンのタウンビー村にある経庫（寺院番号1969/1265; 一般にタウンビー・ピタカッタイとよばれている）の小暦1068年 (1706 A. D.), チャウンウー郡キンムン村のローカアウンミェー窟（エータンタイとも称されている）の小暦1118年 (1756 A. D.), パガンのアーナンダ寺院の北隣にあるアーナンダ煉瓦寺院（アーナンダ・オウチャウン）の小暦1137年 (1775 A. D.), ウパーリ戒壇の小暦1156年 (1794 A. D.)などは，いずれも墨文によって壁画の製作年代が明示されている例である。

こうした確実な資料が何もない壁画についてその製作年代を判定するには，通常，画の様式が重要な手掛かりとなる。すなわち年代が明らかな壁画の画法，画題，構図などの特徴を基準に，年代不詳の壁画との間にどの程度の共通性，類似性が認められるかを調べる。こうした観点からすれば，パガン時代の壁画とニャウンヤン，コンバウン時代の壁画との間には大きな差異が存する。パガン時代の壁画に共通してみられる人物群の円顔（例えば，パトーダーミャー，ペーナタグー，アベーヤダナーなど），目尻の釣り上がった切れ長の鋭い眼（例：アローピェ，ウィニードオ，ウェッチーイン・クーピャウチーなど），中央部が垂れ下がった一重の重苦しい瞼（例：ナンダミンニャ，タヤンブー，寺院番号788など），先端が鳥の嘴のように鋭く尖った鼻（例：パヤートンズー，パヤーンガーズー，コンドオヂーなど），後頭部で結った男性の髷（例：ティンガヤーザ，タンブーラ，寺院番号418など）と肩から背中にかけて伸ばした女性の長い髪（例：ペーナタグー，テインマズィー，ナガヨンなど），耳朶にくらべて不相応に大きい丸型の耳飾り（例：テッチャムニ，テインマズィー，タンブーラなど）などの特徴は，後世の壁画にはもはやまったく認められない。

では，ニャウンヤン時代の壁画にはどのような特徴があるのか。この当時の壁画にみられる特徴としては，次のような点を指摘する事ができる。

1）人物像の顔の輪郭は，男性が丸味を帯びた横長の方形，女性は丸味を帯びた逆三角形（従っていわゆるオデコが大きい）で，パガン時代のような円形ではない。

4) Ba Shin (1964), pp. 20, 90.

2) 男女とも頬が豊か（いわゆるお多福顔）で，ことに男性の顔はあたかも口の中で飴を頬ばってでもいるかのごとく片頬が極度にふくらんでいる。

3) 眼がぱっちりと大きく愛くるしい。パガン時代の釣り上がり気味の鋭い眼とはきわめて対照的である。

4) 瞼は二重になっていて，涼しげなまなざしを形作っている。パガン時代の中央部が垂れ下がった一重の重苦しい感じはもはや見られない。

5) 鳥の嘴のように鋭く尖ったパガン時代の鼻とは異なり，鼻が丸味を帯びている。いわゆる団子鼻である。

6) 下唇がやや部厚くふっくらしている。

7) 前のほうが太く後にゆくに従って細くなる扇型（あるいは円錐形）の耳飾りを，男女とも左右の耳にはめ込んでいる。

8) 男性は王族の場合“立烏帽子”に似た帽子（ビルマ語 Baung）を，臣の場合は螺旋状あるいは中央部に突起のある広鍔の帽子を，兵士達は菅笠状の帽子（ビルマ語 Maukto）を被っている。女性は環状の簪（ビルマ語 Shwe-Katawt）を通して髪を“文金高島田”風に高く結い上げている（ビルマ語 Yagindon)。後頭部での髷は見られない。

9) 服装は，男性の場合，襟なし，半袖で，裙の裾が臀部もしくは膝ぐらいに達する丹前状の長い貫頭衣（ビルマ語 Thindaing）を着，下半身には足首まで覆う末広がりのゆったりした腰巻またはロング・スカート状の下衣（ビルマ語 Pahso）をまとっている。下層の者は間では，下衣を太股の位置まで捲くし上げ余った布を後から前へ股間を通して廻し先端を臍のあたりでねじ込んだ（ビルマ語 Gadaung-Kyaik）者もいる。

女性は胸元から腹部を覆うぴっちりした袖なしの内衣（ビルマ語 Yinzi）で上半身を締めつけ，下半身には踝まで達する下衣（ビルマ語 Htamein）をはいている。また背中から腰，臀部までを覆うショール状の長い袖なし外衣（ビルマ語 Sulya または Tabek）を両肩に羽織っていることもある。

10) 兵士達は，刀か槍または弓あるいは円型の楯を携えている。鉄砲姿はみかけられない。

以上が描かれている人物像の特徴であるが，技法面から見ると，(1) パガン時代同様，遠近感がまだ確実には表現されていない。(2) 描かれている事物相互間の大小関係に客観性，自然性がなくパガン時代同様極端に不均衡である。例えば人物に較べて建物や象，馬などが小さすぎたり，小鳥が異常に大きすぎたりしている。(3) 壁面は上下数層に分けられているが、パガン時代とは異なりパネル状の区切り（枠）はない。画面は帯状に横に長くなっており，同一壁面での画題の区別は直線ではなく波状線によって仕切ってある。(4) 画題はパガン時代同様純仏教的であるが，画材には現実的，世俗的要素がふんだんに取り入れられている。(5) 色彩的にはパガン時代の赤，茶，黒などの暗色に対して，青，緑などの明るい派手な色がニャウンヤン

時代の特色となっており，青系統の色と赤系統の色とのコントラストが印象的であるといったような特徴が認められる。

II　ニャウンヤン時代の壁画の所在地

1)　ティローカグル (Tilawkaguru) 洞窟

サガイン丘陵は，サガイン市の北方をイラワジ河右岸に沿って南へのびる低い山並みであるが，ティローカグル僧院はその丘陵を南西側から登った一角にある。僧院境内の東側に西向きの崖があり，その崖をくり抜いて入口を3カ所もつ洞窟が作られている。内部にはカタカナの“ロ”の字型に回廊が設けられており，東側回廊と南側回廊の左右壁面ならびに天井に壁画が描かれている。パガン時代の壁画に較べると色も形も極めて鮮明で，特に南側回廊両壁面の中，下層部分は未だにみずみずしさを保っている。

壁面は上下4層に区切られ，最上層の面には偏袒右肩，触地印の過去28仏が描かれている。各層の画の下にはビルマ語の説明文が記されており，それらの文によれば中層の画は仏伝と本生譚，最下層は地獄図である。本生譚は1図1景のパガン方式とは異なり，ひとつの話を物語風に描く連続形式をとっている。そのため547話すべてを網羅する事はできず，第504話バッラティーヤ本生物語，第506話チャンペッヤ本生物語，第516話大猿本生物語，第527話ウンマダンディー女本生物語など数話が取り上げられているだけである。

本生話に描かれている人物群像の服装や髪型，装飾品などは，この当時の風俗を反映しているらしく，後世のそれとは随所で趣を異にしている。男性は，上半身に膝まで達する長い丹前状の半袖の上衣 (Thindaing) をまとい，下半身には各種の紋様のついた足首まで達する下衣 (Pahso) をはいている。上衣は胸元にローマ字の“V”型の切り込みがあるが，前開きではなく貫頭衣である。王族は先端が後に折れ曲った“烏帽子”状の帽子 (Baung) を被り，環状および馬蹄状の大きな胸章（ビルマ語 Bayet) を下げている。従臣達は三層の螺旋状，またはローマ字の“T”を逆さまにした鍔付きの帽子を被っている。下層の者には，下衣を膝上まで捲くし上げ布端を後から前へ股間を通して廻し臍のあたりでねじ込んだ格好をしている者が少なくない。

女性は，胸元から下腹部さらに膝ぐらいまでを覆う袖なしのぴっちりした内衣 (Yinzi) を巻きつけ，下半身にはロング・スカート状の下衣 (Htamein) をはき，背中，腰，臀部などを覆う長いショール状の外衣 (Sulya) を両肩に羽織っている。髪は，環型の大きな髪飾り (Shwe-Gadawt) を通して頭の真上に高く結い上げて (Yagindon) いる (写真1)。耳飾りは男性のとは異なり丸型である。

顔の輪郭は男性の場合下ぶくれの方形で，通常片頬が極端にふくらんでいる。女性の顔は“おむすび”を逆様にした形すなわち逆三角形が基本になっている。男女とも眼はぱっちりと

大きいが，パガン時代のような切れ長ではない。上瞼の直ぐ上にもう一本線が描かれ，二重瞼である事を明示している。眉毛は半月形またはひらがなの“へ”の字型で，眼との間隔が大きい。鼻はいずれも丸鼻である。正面を向いている場合は鼻梁は描かれていない。唇は男女ともぽってりと部厚い。首に三条の筋が描かれている事もある。

建物は，人物像に比して不自然に小さい。通常数層に重なった屋根だけが描かれ，吊り屋根のような印象を与える。これらの屋根は，通常棟の両端が上方に反り返っている。柱は稀に描かれる事もあるが，壁が描かれる事はほとんどない。樹木は，円または楕円の中に蛸の足状または魚の骨状に枝を描き込んだきわめて形式的，類形的なものである。色彩の面から言うと，赤，黄と緑，黒，白などが対比的に用いられ，パガン時代の壁画に較べて遙かに華やいだ明るい雰囲気をかもし出している。

ティローカグル洞窟は，ニャウンヤン王朝のナラワラ王(1672～73)によって1672年に建造された[5]と言われている。ここの壁画が洞窟掘削直後に描かれた（その可能性は高い）とすれば，それは17世紀後半の作品という事になる。

2) **ローカフマンギン** (Lawka Hmangin) **洞窟**

ティローカグル洞窟同様サガイン丘陵の一角にある洞窟で，ローカフマンギン僧院（別名ゼーヂャウン）の境内東側に西向きになった崖をくり抜いて作られている。入口は3カ所で，内部の回廊は西に向かってカタカナの“ヨ”の字型を成している。東側回廊の中央口と南口との中間点および中央口と北口との中間点にそれぞれ西向きの階段が設けられて二階に通じている。

壁画は，中央入口から奥に向かった左右両壁面および北入口の南側壁面（北側壁面は漆喰が剝落）ならびに北側階段を上がった二階の一部にだけ残っている。全体的に壁面の剝落磨損の度合いがひどく，壁面もティローカグルほど鮮明ではない。画題は本生譚で，画の下に記されたビルマ語の説明文によると第543話槃達龍本生物語，第544話大那羅蛇迦葉梵天本生物語，第547話毘輪安呾囉王子本生物語などである。

人物群像の服装，髪型などの特徴は，ティローカグルの壁画のそれときわめてよく似ている。すなわち顔の輪郭は丸味を帯びた方形または逆三角形で，男性の豊頬，片頬のふくらみ，ラッパ状の耳飾り，“V”の字型の切り込みがあり裾長の半袖付き貫頭衣 (Thindaing)，王族の烏帽子型帽子と環型の首飾り (Bayet)，胸に吊した綬 (Salwe)，従臣達の三層帽または逆“T”字型帽，女性の高く結い上げた髪 (Yagindon) と花弁状の大きな髪飾り，肌に密着した内衣 (Yinzi)，足首まで達する下衣 (Htamein)，両肩に羽織った外衣 (Sulya)，両性共通の見開いたような大きな瞳，細くて長い眉毛，眼との間の広い間隔，二重になった瞼，鼻梁が描かれない丸い鼻，めくれたような感じの部厚い唇，首の三本の条など（写真2）は，ティローカグルの壁

5) Aung Thaw (1972), p. 132.

写真1　ティローカグル洞窟の壁画

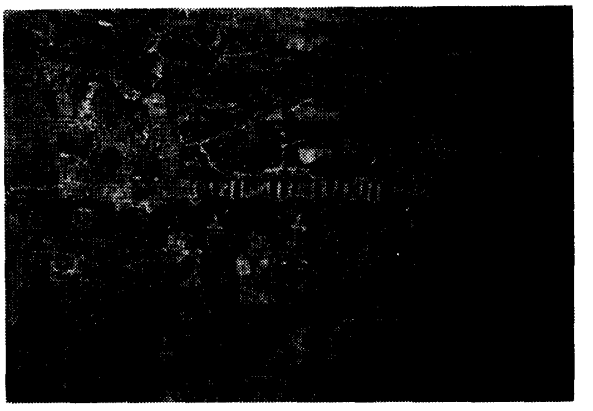

写真2　ローカフマンギン洞窟の人物群像

画と同一時代の風俗を反映している。また人間に較べて不自然なほど建物が小さいとか，楕円形を中心とする類型的な樹木の描き方もティローカグルのそれと共通している。これらの基本的な特徴から，ローカフマンギンの壁画がティローカグルの壁画とほぼ同時代の作品である事は間違いないと思われる。

しかし相違点がない訳ではない。例えばローカフマンギンの壁画には，女性の髪の先端が後頭部へ細長く垂れて (Hsameit-cha) いたり，耳飾りを付けていない男がいたり，王族の烏帽子状帽子の左右に鶏の鶏冠のような耳覆い（ビルマ名 Nagin）が付いていたり，胸の前に下げた綬の最下部に大きな玉がひとつ付いていたりなどの特異性もみられる。また円型の楯と槍とを手に持ち首の周囲に鎧（日覆い）の付いた菅笠 (Maukto) を被った兵士の群像もみられる。ローカフマンギン特有のこうした特徴は，ここの壁画がティローカグルのそれよりも若干遅く描かれた可能性を示している。なお，色彩の点から言うとローカフマンギンの下地には明るい茶色が使われており，ところどころに白が用いられてはいるものの人物の衣装や樹木などの緑色がきわめて鮮明で，全体として緑がかっている。

ローカフマンギン僧院はティターダナダザ師の開山になるもの[6]で，ニャウンヤン時代（18世紀初頭）に編纂されたウー・カラーの『マハーヤーザウィンドオヂー』（大王統史）にその建立の模様が記されている。それによると，『小暦1063年(1701 A. D.), ダボドゥエ月白分8日土曜日，ローカフマンギン僧院の重閣，層閣の頂柱の取り付け工事が完了した。国王は象兵，騎馬兵を従えて轎に乗りローカフマンギンへと行幸あそばされた。東埠頭でカラウェイ舫にお乗り換えになり，同日午後4刻ティターダナダザ僧正へ僧院を御献上あそばされた』[7] と記されている。このようにローカフマンギン僧院は18世紀の初頭には既に建立されていた。その境内にある洞窟も同僧院の建立と同時に作られた可能性が高い。この事から，ローカフマンギンの壁画は18世紀初頭の作品であるとみなして差し支えないであろう。

6) Report of the Director, *Archaeological Survey, Burma for 1963*, p. 21.
7) U. Kala, Vol. III, p. 295.

3) シュエズィーゴン (Shwezigon) 窟

アマラプーラからサガインへと向かうアバ鉄橋の袂からイラワジ河の河原へと通じる牛車道を降りて，渡し舟でミッンゲー (Myitnge) 河を渡河するとインワ城趾に辿り着く。そのインワ城趾からダダーウー町へと向かうかなり大きな道路を東進するとピンヤの遺跡に至る。風化して崩れかけた幾つかの煉瓦造りの仏塔を除くと，そこにはピンヤ時代の面影は何も残っていない。その道路の北側，やや小高い丘の上にシュエズィーゴン仏塔がある。その仏塔の境内へと通じる石段の右側に横掘りの小さな窟があり，入口左右の壁面に壁画が残されている。

両壁面とも上下二層に分かれ，上層には小鳥の群が，下層には両手に花を持って合掌した貴族の姿が描かれている。両手に花を捧げ持った合掌図はパガンのチャンスィッター窟院にもみられるが，そこの人物は貴族ではなく袈裟を偏袒右肩にまとった出家である。

シュエズィーゴンの人物像の顔容や服装などの特徴はティローカグルの人物像のそれと同質で，画法からみてここの壁画はティローカグル窟の壁画と同時代の作品だと判断される。すなわち人物像は例外なく片頬が豊かにふくらみ，眼は驚いた時のように大きく見開かれ，二重瞼で，眉毛と眼との間が離れている。頭には烏帽子状の帽子を被り，耳朶には扇型の耳飾りをはめ込み，裾が膝まである裙の長い半袖付きの貫頭衣 (Thindaing) を着ている（写真 3）。ここの壁画は，烏帽子の横に鶏冠状の耳覆いをもっていない点ではティローカグルの壁画と同じだが，腰帯を締めている事や目尻が上に釣り上がっている事，単玉付きの綬 (Salwe) を肩から斜めに吊しているなどの点ではローカフマンギンと共通している。もっとも，眉毛の尻が上方へ釣り上がり気味であるとか，唇は部厚いが小さい（いわゆる“おちょぼ口”）とか，手首に腕環をはめているとかいった特徴はティローカグルにもローカフマンギンにもないシュエズィーゴン固有の特徴である。

4) タウンビー・ピタカッタイ（経庫）

ニャウンウー町からパガンへ向かう道路のパガン寄り，タヤバ門より200メートルばかり東側の地点を北すなわちイラワジ河のほうに向かって小道を入ると，西向きに 3 箇所の入口をもつ煉瓦造りの建物（寺院番号 1969/1265）がある。タウンビー村の西はずれにあるので一般にはタウンビー経庫とよばれている。この建物は東側にも入口を 1 箇所もっている。内部は東西二室に分かれ，西室は天井が低く東室は天井と床との間が高い。東室の入口を入ると室内中央の左右に二本の大きな煉瓦製角柱があり，その角柱の上部はアーチ式の天井で相互に繋がっている。

その両角柱の周囲と，角柱と奥の壁との連繋壁および部屋の西，南両壁面とに壁画が残っている。東壁と北壁では壁面の磨滅および漆喰の剝落によってほとんど確認できない。壁画は壁面の上層にのみ 6 層に分けて描かれている。色彩は緑と赤とが鮮明である。ティローカグル窟

写真3　シュエズィーゴン窟(ピンヤ)の合掌礼拝図

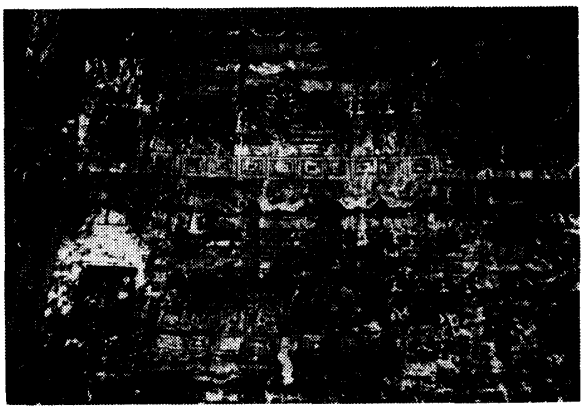

写真4　タウンビー経庫内の人物群像

のように，下地には赤色を用いている。

人物群像の特徴はニャウンヤン時代の他の壁画と全く共通で，男性は片頬がふくらみ，団子鼻で，眉毛が“へ”の字型をしており，眉と眼との間隔が広い。頭には烏帽子状の帽子を被り，耳朶には後部が細く前部の太い耳飾りをはめ，裾が膝まである長い丹前状の半袖付き貫頭衣 (Thindaing) を着用し，下半身には足首まで覆う下衣 (Pahso) をはいている。首のまわりに環状の幅広い首飾り (Bayet) をはめているため，ティローカグルのような胸元の“V”字型の切れ込みは見えない。なお，王族は胸の前に単玉付きの大きな綬 (Salwe) を下げている。ここの男性には，中央に人差指くらいの突起の付いた椀型の帽子を被っている者も見かけられるが，こうした形の帽子はティローカグルやローカフマンギンの逆“T”字帽の亜形と考えられる。腰に帯を締めている点ではピンヤのシュエズィーゴン窟と共通している。

女性は顔の輪郭が逆三角形で，髪を頭の真上に高く上げて先端を後方に垂らし，上半身には胸から臀部までを覆うぴっちりした袖無しの内衣 (Yinzi) を付け，下半身には踝まで達する下衣をはき，両肩から背中にかけてはマント状の外衣 (Sulya) を羽織っている（写真4）。

タウンビー経庫の壁画も事物相互の大小関係がアンバランスで，ことに人間の身体に対して建物が小さすぎる。家の屋根は通常三層になっており，棟の両端は例外なく上に反りかえっている。各層の画の下には，ビルマ語の説明文がみられる。中央左角柱の東壁面には「小暦1068年ナヨン月黒文6日寺院建立」と記され，この経庫が1706 A. D. の建立である事を示している。画法上の特徴とあわせてこうした墨文の存在からも，この経庫の壁画が18世紀前半の作品である事はほぼ間違いないと言ってよいであろう。

5)　シュエオンミン (Shwe Onmin) 窟

パコックー市の北東20マイル，イラワジ河とチンドゥイン河との合流点近くにパカンヂー村がある。コンバウン時代までは代官 (Hkayaingwun) が任命されていた[8] ほど大きな町のひと

8) Konbaungzet, Vol III, p. 751.

つであったが，今では人口 900足らず（1970年現在），行政的には7マイル離れたイェーザヂョー町を中心とするイェーザヂョー郡内の一村落にすぎない。この村のはずれ，旧パカンヂー町の城壁跡を北西方向に通り抜けたところ，イェーザヂョー町へと向かう道路の左側にシュエオンミン寺院の境内がある。煉瓦塀に囲まれた広大な面積の境内には，王朝時代に存在していたといわれる木造の寺院はもはや残っていない。しかしレンガ造りの仏塔や窟院は今でも残っている。

窟院の内部にはニャウンヤン時代の作と思われる壁画が残っている。壁面は上下四層に分けられ，それぞれ仏伝や本生譚とおぼしき画が描かれている。各層の下にはビルマ語の説明文が記されているが，場所によってはもはや判読できないほど磨損している。ビルマ文字の形（書体）はティローカグル窟の文字に酷似しており，ほぼ同時代の文字だと判断される。

人物群像は，仏陀，出家，王，王妃，女官，貴族，臣，兵士などで，男女とも顔の輪郭は逆三角形または底辺のほうが上辺よりも短い方形である。眼は切れ長，二重瞼で，眉は三日月形をしており細くて長い。眼との間隔はかなり開いている。鼻はいわゆる団子鼻（丸鼻）で，唇が小さい(写真5)。男性は，表面が筍型をした烏帽状の帽子または中央に人差指くらいの突起のある椀型の帽子を被り，耳朶には前部が太く後部が細くなった耳飾りをはめている。服装は，上半身が胸元に“V”字型の切り込みのある膝まで達する長い貫頭衣，下半身は踝までおよぶゆったりした下衣である。上衣の袖は半袖だが袖口が広く，後世の広袖上衣 (Wut-lon) に近い。王族は首の回りに幅の広い環型の首飾り (Bayet) をはめ，円形多弁の花模様をした大型の玉をひとつだけ付けた幅広の綬 (Salwe) を肩から斜めに吊し，手首に腕飾りをはめている。王の烏帽子には両耳の後に鳥の翼型の大きな耳覆い (Nagin) が付いている。頬のふくらみはあまり強調されていない。兵士達は下衣をまくり上げ(裾からげをし)，刀，槍または弓を携えている。鉄砲を持つ姿はみられない。

女性は，環型の髪飾りを通して髪を頭の上に高く結い上げ (Yagindon) て先端を後へ垂らす (Hsameit-cha) か，後頭部で丸髪を結う (Nauktwe-ton) かしている。上半身には胸元から膝までの長さのぴっちりした内衣を着，下半身には足首まで達する下衣をはき，外衣 (Sulya) を両肩に羽織るか片方の肩にかけて前後に垂らすかしている。当時としては珍しく袖付の上衣 (Htainmathein) 姿も見られる。

以上の特徴からシュエオンミン窟の壁画は，ティローカグルやローカフマンギンなどと同じくニャウンヤン時代の壁画だと判断されるが，男性の頬のふくらみがさほど強調されていないことや女性の後髷，袖付き上衣の着用などの特異性からみると，ニャウンヤン時代でも後期それもかなりコンバウン時代に近い頃の作品だと解釈される。

写真5　シュエオンミン窟内の男女群像図

写真6　サウンタモー窟内の王族の図

6)　サウンタモー (Saungtamo) 窟

シュエボー市の北西14マイルのミインズィー (Myinzi) 村にある。サウンタモーとは，東西南北に小窟を穿った仏塔(Zedi) の名前である。壁画はこれら四つの窟の内部壁面に描かれている。壁画は4層から6層（各窟ごとに異なる）に分かれ，最上層は28仏，その下は仏伝，本生譚となっている。層と層との中間の帯状部分にビルマ語で説明文が記されている。その中に『小暦1102年ワーガウン月黒分13日月曜日正午記し終える。施主マチャンピュー，施主シュエイー夫妻の功徳』とある事から，この窟の壁画が1740A. D. に描かれた事が判明した。

画法上からもサウンタモー窟の壁画が，ニャウンヤン時代の壁画に共通の特徴をもっている事が指摘できる。すなわち人物の顔容は方形で，眼が大きく二重瞼，眉はほっそりと長く眼との間隔が開いている。男性は，王族の場合表面が筍状になった烏帽子を，臣の場合は螺旋状または，中央に突起の付いた椀型の帽子を被り，耳朶には円錐型の大きな耳飾りをはめ込んでいる。王族の場合には，首に環型および馬蹄型の首飾りあるいは胸章 (Bayet) を下げている（写真6）。服装は，上半身に“V”字型の胸部切り込みがあり膝までの長さのある半袖付きの貫頭衣を着用し，下半身には足首まで届く下衣をはいていてる。女性は，環状の髪飾りを通して髪を真上に高く結い上げ先端を後に垂らしている。身体は，胸から膝まである長い内衣でぴっちりと締めつけ，下半身には踝まで覆う下衣をはき，両肩には背中から臀部までを覆う外衣を羽織っている。

建物は人間に比して相対的に小さく，屋根は3層ないし4層構造になっている。棟の両端が

上方に反り返っている点はニャウンヤン時代の他の壁画と変わりない。樹木の描き方はいくらか類型性を脱し，幹と枝とを区別して表わすなど自然に近くなっている。

以上述べたような様式上の特徴は，サウンタモー窟の壁画がティローカグルやローカフマンギンなどの壁画と同質であることを示している。もっとも烏帽子の表面が筍状になっている事，左右に大輪花弁状の耳覆いが付いている事，腰帯を締めている事，貫頭衣の袖口が広い事，手に腕環をはめている事などの諸点から判断すると，ティローカグルよりもローカフマンギンやピンヤのシュエズィーゴンに近い。一方，頬のふくらみがさほど極端でない事や王や王族が身につけている綬 (Salwe) には玉が3個も付いており単玉だけのシュエズィーゴンやシュエオンミンにくらべて複雑高級化している事など，サウンタモーの壁画のほうが時代的には新しいものである事を証明している。

人物群像の中には，上半身が裸，下半身は下衣を股間まで捲り上げて締め付けた格好の男の姿もみられる。彼らは帽子を被っておらず，頭上に丸髪を結い，耳には円型(円錐型ではない)の耳飾りをはめている。これは当時の下層社会の風俗を反映しているものと考えられる。なお，この窟の壁画は，色彩的には緑色と茶色（または朱色）とが主力になっている。

7) ヤダナーミンズー (Yadana Minzu) 寺院

タッピンニュ，ナッフラウンチャウン，パトーダーミャー，ミーマラウンチャウンとパガン時代建立の寺院に沿って東西に伸びる牛車道がパガン・チャウ間に通じる南北の大通りと交差したその西北隅に，表面を石灰で真白に塗った小型の寺院がある。これがヤダナーミンズー寺院で，東西南北に1箇所ずつ設けられた入口から内部に入ってみると，壁面から天井にかけて文字どおり一寸の隙間もないほどびっしりと画が描かれている。入口両側の壁面は正方形に仕切られ，各パネルの中に様々な形の鳥の絵が描かれている。室内の壁面は上下5層に分けられ，最上層には28仏の成道図，その下には出家，男性の在家信者，女性の在家信者の順に合掌礼拝図が描かれている。

人物像の顔容はほぼ逆三角形だが，男性の在家信者の場合は豊頬で，ことに片頬のふくらみが強調されている。眼は大きく見開かれ，二重瞼で，眉は細長い三日月型をしており眼との間隔が広い。頭には逆“T”字型または烏帽子状の帽子を被っている。耳朶には男女を問わず大きな耳飾りがはめられている。衣装は，男性の場合丹前状の長いゆったりした上衣（半袖の Thindaing と筒袖の Thoyin Eingyi）を着，下半身には足首まで達する下衣をはいている（写真7）。女性の場合は，胸元から膝までのぴっちりした内衣と足首まで届く下衣とを着用し，背中から臀部までを覆う外衣を両肩に羽織っている。

在家信者達のこうした風俗的特徴は，ニャウンヤン時代の壁画一般に共通するものである。しかし，ヤダナーミンズー寺院の壁画が描かれたのは，ニャウンヤン時代でも末期つまりかな

りコンバウン時代に近い頃ではなかったかと考えられる。それは，男性の頬のふくらみが絶対的でない(頬のふくらみが描かれていない場合もある)事，丹前状上衣の袖に半袖 (Thindaing) 以外に肘より少し長めもしくは手首までを覆う筒袖 (Thoyin) があったり，筒袖以外に広袖 (Wut-lon) もみられる事，帽子を被っていない人がいる（その場合は頭の真上または後頭部に髷を結っているのが認められる）事，耳飾りをはめていない人もいる事，女性の場合髪型に様々なバリエーションが見られる（ニャウンヤン時代に優勢であった頭上に高く結い上げ先端部を後に垂らす髪型のほかに，後頭部に丸髷を結っている場合もみられる）こと，ニャウンヤン時代を通じて普遍的な袖無しの内衣 (Yinzi) の代わりに，袖付きの上衣 (Htatngmathein) を着たり，“振り袖”のように袂の長い上衣 (Wut-lon) を着たりしている女性がいる事等々の理由による。なお各層の下に記されているビルマ語の説明文によると，同一層内に描かれてはいても人物相互間に関係はなく個人個人を描いたものである。

写真7　ヤダナーミンズー寺院の合院の合掌礼拝図

8)　**その他**

ニャウンヤン時代の壁画は，以上のほかにもその存在が知られている。例えば，チンドゥイン河の右岸ヤマビン郡内にあるポーウィン山（モンユワー市の対岸ニャウンビンヂーから14マイルの地点にある）の西面をくり抜いて造られた洞窟内の壁面と天井に描かれている画はニャウンヤン時代の作だと考えられている。[9] またビルマ人美術家ウー・エーミインの説明によると，セイピュー町の北方，ヨオ川がイラワジ河へと流れ込んでいる合流点の丘（ヤダナーマンアウン丘）の上にある小仏塔内にも28仏や仏伝を描いた壁画があり，タウンビー村の経庫の壁画にきわめてよく似ているとの事である。上ビルマには，まだ内部に壁画を内蔵していながら地元の人にしか知られていない，あるいは世間にも知られていないような小仏塔や寺院が各地にひっそりと残っている可能性がある。それらの壁画が時代とともに風化し，汚損，磨滅，剝落あるいは人為的破壊を蒙る恐れがある事を思うと，全地域にわたる壁画の総合的調査の必要性を痛感する。

9) Archaeological Department (1966), p. 30.

参 考 文 献

Archaeological Department, Ministry of Culture. 1966. *Shayyoe Myanma Bagyi.* (in Burmese), Rangoon.
Aung Thaw, U. 1972. *Historical Sites in Burma.* Rangoon.
Ba Shin, U. 1964. *Pagan Minzazu Thudaythana Lokengan.* (in Burmese), Rangoon.
Bigandet, Revop. 1880. *The Life or Legent of Gaudama, the Buddha of the Burma.* Vol. I, II, London.
Bo Kay, U. *Pagan Shayhaung Thigaungzayamya.* (in Burmese, typescript)
Cowell, E. B. 1895. *The Jataka or Stories of the Buddha's Former Births.* Vol. I-VI, Cambridge U. P.
Encyclopedia Birmanica. (in Burmese), Vol. IV, Rangoon. 1967.
Kala, U. 1960. *Maha Yazawindawgyi.* (in Burmese), Vol. III, Rangoon.
Konbaungzet Maha Yazawindawgyi. (in Burmese), Vol. III, Rangoon.
Report of the Director, *Archaeological Survey, Burma for 1963.*
Wun, U. 1964. *Tekkadoe Myanma Abidan.* (in Burmese), Pt. V, Rangoon.
大野徹. 1973.「ビルマの壁画——パガン時代を中心として」『東南アジア研究』11巻3号, pp. 360-381.
———. 1974.「ビルマの壁画(Ⅱ)——パガン時代を中心として」『東南アジア研究』12巻1号, pp. 78-90.
『南伝大蔵経』第28巻～第39巻（本生経1～12).